

梁北部地域におけるフワソントメタマバエの被害時期と桑収量

(蚕 試 ・ 一 年 分 場)

1. 背 景 と 収 入

フワソントメタマバエは、数年来その被害範囲を梁北部地域にまで広げ、夏秋蚕用桑の葉質・収量に大きな影響を与えている。本種は6月末から9月にかけて数回発生するが、その被害時期によって桑の再発芽状況が異なり、桑の収量も大きく左右される。このため時期別に大体的なフワソントメタマバエの被害状況をつくり、桑収量との関係を検討し、これに参考にする。

2. 技 術 内 容

1) フワソントメタマバエによる被害時期と桑収量

(1) フワソントメタマバエによって桑が芯止りとなった場合、8月中旬までは再発枝条の伸長がみられるが、8月下旬以降は再発枝条の伸長はみられない。したがって8月下旬の芯止り(被害)が最も収量低く、100%芯止りの場合春切桑で20%、夏切桑で30%(改良風通)〜40%(やましのぎ)減収する。さらに8月下旬〜9月上旬に芯止りとなった場合、葉の硬化が促進され、葉質が低下する。

(2) 同一枝条が7月下旬と8月下旬の2回芯止りになった場合(実害ではこのケースが多い)は、春切桑では20〜30%、夏切桑では40%減収する。

(3) 株の全枝条が芯止りとなった場合、春切桑では8月下旬<8月中旬<6月下旬<9月上旬<8月上旬<7月下旬の桑収量となり、夏切桑では8月下旬<7月下旬<9月上旬<8月中旬<8月上旬の桑収量である。

(4) 株の半数の枝条が芯止りとなった場合は、摘芯時期が早い程、収量が少なくなる傾向を示す。

(5) 改良風通とやましのぎを比較した場合、春切桑では大差はないが、夏切桑ではやましのぎの再発枝条が少なく、収量の落ち込みが大きい。

2) 被害時期からみた防除の要点

フワソントメタマバエは、梁北部において3〜4世代をくり返すが、1化期(6月下旬〜7月上旬)の発生量は少なく、2化期以後の発生量が急激に増加して実害に結びつく場合が多い。とくに、芯止りによって再発枝条が停止する8月下旬に、本種の3化期の発生最盛期にあたり、また、夏切桑の収量が低下する7月下旬の被害は、2化期の発生最盛期にあたるので、この時期の防除に重点を置く。

3 指 導 上 の 留 意 事 項

1) フワソントメタマバエの発生時期は、気象条件あるいは地域によって多少変動があるので、発生予測に留意する。

2) 8月下旬に芯止りになった桑は、葉の硬化が進み、葉質が低下するので、早目に収穫する。

4 参 考 文 献 ・ 資 料

及川英雄ら (1984) 東北蚕糸研究報告 (10)

5 試 験 成 績

1) 試験年次 昭和60年

2) 試験方法

慣行肥培管理のやましのぎおよび改良風通の春切桑と夏切桑を用い、春切桑は6

月下旬、7月下旬、8月上旬・中・下旬、9月上旬に摘芯した。また、夏切葉は7月下旬、8月上旬・中・下旬、9月上旬に摘芯を行った。

供試株は、各己2株について株の全枝条を摘芯すると、同一株のうち条長、条径が可及的近似値をもつ二本のうち1本を摘芯し、1本を残す方法で株の約半数の枝条を摘芯する区を設定した。

3) 試験結果

(1) 摘芯時期と両枝葉との関係を見ると、少きしので、改良荒迄とも春切、夏切を問わず、8月中旬の摘芯まで両枝葉の伸長をみたが、8月下旬以降の摘芯では両枝葉の伸長はみられなかった。

(2) 葉の収葉量は春切の全枝条摘芯区で、7月下旬の摘芯が無摘芯と同等の収葉量を示したが、他の摘芯時期では何れも無摘芯を下廻り、とくに両枝の区は少かった。8月下旬、7月下旬と8月下旬の2回刈込み6月下旬の摘芯において少なかった。

(3) 夏切の全枝条摘芯区は、無摘芯区に比べて何れの時期の摘芯も収葉量が少なく、とくに8月下旬刈込み2回摘芯区は無摘芯区との差が大きかった。

(4) 葉株の半数の枝を摘芯した場合は、摘芯した枝条が無摘芯枝条に生育を阻害されるために、摘芯時期の早いほど収葉量が少なかった。なお、少きしのでの生育不良がとくに目立ったが、株単位でみた場合の収葉量の低下は少なかった。

4) 具体的データ

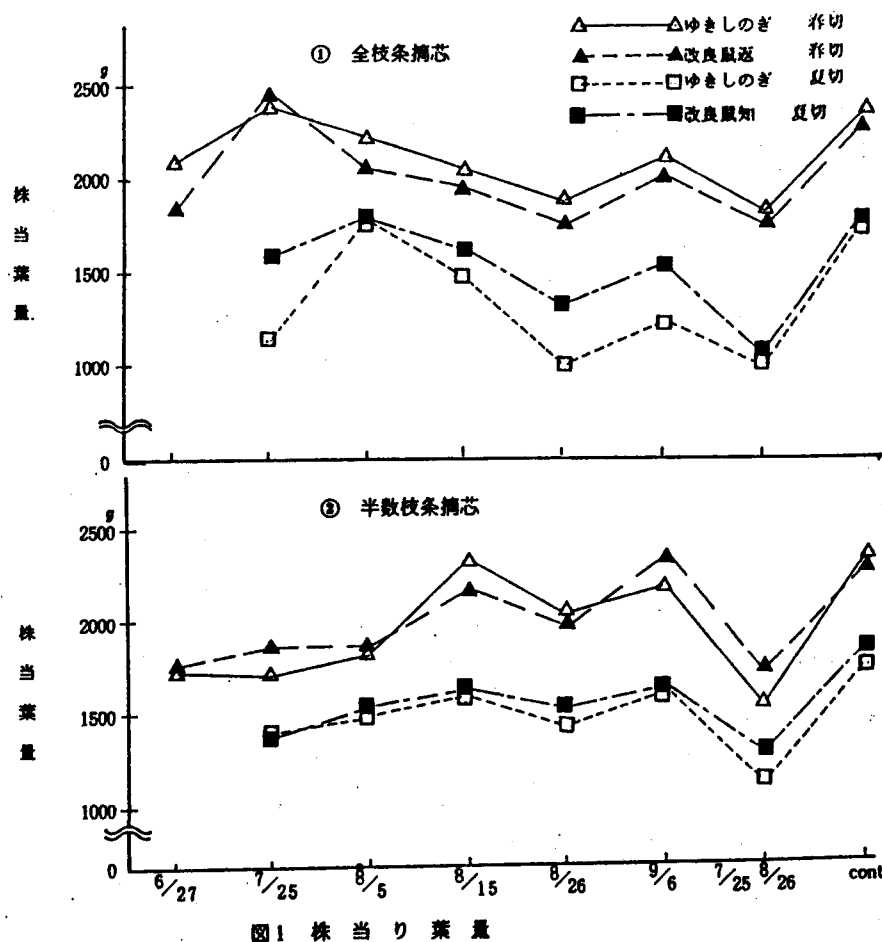


図1 株当り葉量